

古バビロニア時代ニッペールにおける エレシュ・ディンギル女性祭司

ニコル・ブリシュ*
唐 橋 文 訳

はじめに

本稿は、古代の宗教における行為者としての女性の役割を明らかにするために、ニッペール出土の古バビロニア時代の文書に登場する高位の女性祭司（エレシュ・ディンギル女性祭司とナディートゥム女性祭司）を何人かとりあげ、経済や宗教および社会における彼女たちの役割を議論する。それらの女性祭司が、現存するデータの性質および現代の研究者たちによるその解釈に関して、有益なケース・スタディを提供すると考えられるからである。

ジェンダーの理論家ジュディス・バトラー（Judith Butler）は、女性の抑圧は、歴史の史料に読み込むことができる、あるいは、そうされるべき歴史上の普遍的特性ではないと論じた（Butler 1990: 5–8）。ザイナブ・バフラニ（Zainab Bahrani）も、歴史記録に言及される女性の研究に関して、フェミニスト学問分野およびフェミニスト方法論の適用について議論

* Nicole Brisch, Associate Professor, University of Copenhagen (コペンハーゲン大学准教授)

する中で、似たような指摘をしている（Bahrani 2001: 7-27）。これらの点は、古代メソポタミアの宗教における行為者としての女性の役割を研究していく際にとても重要である。まず、それぞれの研究者たちが、ジェンダーに対してどのような概念をもっているのかを認識する必要がある。そして、筆者はこれに宗教を加えたい。理由は、ジェンダーおよび宗教における行為者としての女性の役割についての現代の概念に基づく解釈を古代の史料に読み込むことを避けるためである。さらに、ジェンダーを扱う際には特に史料批判を注意深く行う必要があることも指摘したい。本稿は、古バビロニア時代のニップールにおける高位の女性祭司に焦点をあて、彼女たちが存在した証拠が何を意味するのか、また、ジェンダーと宗教の現代の概念に、どのような側面がより関連するのかを明らかにしようとするものである。

すでに P. シュタインケラー（Steinkeller 1999）が指摘したように、古バビロニア時代のニップールにおけるエレシュ・ディンギルとナディートゥム（どちらも女性）の研究は、想像する程簡単な仕事ではない。それは、それらの史料にははっきりと書かれていない多くの事柄を、現代の研究者たちが推測しなければならないという、私たちが用いる史料の性格に一部帰すことができる。歴史史料のギャップを埋めるために現代の概念が入り込むのである。

用語の問題もある。以下で見るように、エレシュ・ディンギル祭司の宗教的および社会・経済的役割についていえることは、実際のところ、あまりないのであるが、解釈の難しさは、この女性祭司のシュメール語タイトルをどう読むか（エレシュ・ディンギルと読むか、ニン・ディンギルと読むか、あるいは、最初の文字の読み方を保留にして大文字で NIN-dingir と表示するか）から始まり、これに対するアッカド語のタイトルは何かという問題に続く。また、「祭司」「女性祭司」という用語を容易に古代メソポタミアの文書記録にあてがうべきではないということもしばしば指摘され

古バビロニア時代ニッペールにおけるエレシュ・ディンギル女性祭司（唐橋）

てきた。W. ザラベルガーと F. ヴィエ (Sallabberger and Vuillet 2003–2005: 618) は、厳密に宗教的な任務を果たしている人々に限って「祭司」と呼ばれるべきで、神殿で他の仕事、例えば、ビール醸造やパン焼き、中庭掃除などに従事し、儀式に直接関わらない人々は、その名称で呼ばれるべきではないと論じている。しかし、W. ザラベルガーと F. ヴィエが自ら認めているように、祭司と神殿の他の人員を区別することは難しく、恣意的になりがちである。むしろ、これらの区分はかなり近代的な思考法によるものとみなされるべきであろう。よりふさわしい用語が必要であることは確かであるが、本稿は、神殿で準備され執り行われる宗教祭儀に関わる人々に（たとえそれが僅かであっても）「祭司」という用語をあてる。

ニッペールのエレシュ・ディンギル祭司

よく知られているように、ニヌルタ神はニッペールの二柱の守護神のうちの一柱である。彼は、古バビロニア時代のパンテオンの最高神エンリルの息子でもある (Sallabberger 1997)。ニヌルタ神の高位の女性祭司職に関わるいくつかのシュメール語とアッカド語のタイトルを明らかにしようするや否や、行く手に困難が立ち塞がる。古代においてすでに、ニヌルタ神の女性祭司職のタイトルに混乱が見られる。ニッペールでは、パンテオンの最高神としてエンリル神にエン祭司が割り当てられていたが、エン職に就いていたのは男性だったようである (Renger 1967: 116; Westenholz 1992)¹⁾。今の所、ニヌルタ神に仕えるエン女性祭司がいたことは知られていない。しかし、この状況は普通ではないと思われる。なぜなら、古バビロニア時代の祭司職のヒエラルキーにおいて最高位にあったエン祭司の性別は、仕える神と反対であったと一般的に考えられているからである (Renger 1967: 116)。

おそらくイシン王朝時代に属すのではないかと思われる年名に、ニヌル

タ神のエン女性祭司への言及があるが、この唯一の例についてそれ以上のことはわからない²⁾。この例を除くと、ニヌルタ神に関連する最高位の祭司職は「エン」ではなく「ニン」あるいは「エレシュ・ディンギル」と称されたようである（Renger 1967: 134–135）³⁾。シュメール語のタイトル「エレシュ・ディンギル」はアッカド語の「エントゥム」(ēntum) と「ウグバブトゥム」(ugbabtum) に対応すると考えられる。M. ストール（Stol）は、どのような場合にシュメログラムのエレシュ・ディンギルをアッカド語のエントゥム、あるいはウグバブトゥムに訳すかという問題を詳細に論じ、文脈が最も重要な判断材料になると結論づけた。すなわち、王によるニンあるいはエレシュ・ディンギルの任命が年名に言及されている場合は、その女性祭司は、より位の高いエントゥムと理解されるべきである。それに対し、多数のエレシュ・ディンギルが言及されている場合は（特に行政文書あるいは裁判文書で）、それらの女性祭司は、エントゥムより低い位にあったウグバブトゥムであった可能性が強いとするものである。

イシュビエッラ治世七年の年名が、ニヌルタ神のニン女性祭司の任命を記録する最も早い古バビロニア時代の年名であるが、シュイリシュ三年、イシュメダガン七年と八年もニン（NIN）女性祭司の任命を伝えている。なお、これらの年名にはエレシュ・ディンギルという読みのバリエーションも見られるが、ここでは、NIN の文字はニンと読まれるべきである。エン女性祭司同様に、ニン女性祭司とエレシュ・ディンギル女性祭司も、占いで選ばれ、王によって任命された。通常彼女たちは著名な家系に属した。

さらに M・ストールは、ニップールでは、ニヌルタ神のエレシュ・ディンギル女性祭司とニヌルタ神のルクル（ナディートゥム）女性祭司は同一であると提案している。その理由として、ニヌルタ神のエレシュ・ディンギル女性祭司は、いわゆるサットウック（Sattukku）・アーカイヴ（Sigrist 1984; Brisch 2017）に言及されるが、他の行政文書や裁判記録には言及されないこと、これとは反対に、ニヌルタ神のルクル女性祭司は行政文書や

古バビロニア時代ニッペールにおけるエレシュ・ディンギル女性祭司（唐橋）

裁判記録にはしばしば言及されるが⁴⁾、サットウック・アーカイヴには言及されないことを挙げている。しかしながら、さらなる考察の結果、ストールの提案が誤りであることが判明した。M. シグリスト (Sigrist 1984: 31-33) によって「四コラム粘土板文書」と称された、食物の供物の再分配に関する複数の文書が、確かにニヌルタ神のルクル女性祭司（単数）に言及しているからである。これらの文書では、年名を記す箇所がかなり破損しているため、文書の年代を定めることは難しいが、シンイキシャム王の年名をもつ破片が一つ存在する⁵⁾。これをどのように説明したらよいのであろうか。

四コラム粘土板文書は、ルクルというタイトルがエレシュ・ディンギルというタイトルに取って代わった時代（エンリルバニの治世のずっと後か、リムシン一世の治世中）に作成されたため、ニヌルタ神のエレシュ・ディンギルへの言及がないと解釈できるかもしれない。しかし、ルクル（ナディートゥム）女性祭司は常に複数存在したことがより長期にわたって実証されているのに対し⁶⁾、少なくともサットウック・アーカイヴの記録では、ニヌルタ神のエレシュ・ディンギルは常に一人であったため、この解釈は成立しない。もう一つの説明は、四コラム粘土板文書は異なるアカウントの記録で、ルクル（ナディートゥム）女性祭司は、その食物の供物の異なるシステムに属していたというものである。ニッペールのルクル（ナディートゥム）女性祭司は、シッパルのナディートゥム女性祭司の居住区ガゲーム (*gagûm*) に類似した、「ルクルの場所」(キ・ルクル・ラ *ki-lukur-ra*) と称された地区に住んでいたことを考え合わせると、これは、確かに可能な説明であろう。ニッペールで、ニン女性祭司とおそらくエレシュ・ディンギル女性祭司は、それぞれが仕える神々の神殿に付属する別々の家に住んでいたことを示すと思われる⁷⁾が確証はない。

エレシュ・ディンギル女性祭司の役割

ニッペールでニヌルタ神に仕えるエレシュ・ディンギル女性祭司はどのような役割を担っていたのであろうか。J. レンガー (Renger 1967: 143) によると、エレシュ・ディンギル女性祭司はエン女性祭司よりも低い地位にあったようである。エン女性祭司はもっぱら最高位の神々にのみ確認されているのに対し、エレシュ・ディンギル女性祭司は地位の低い神々にも確認されている。ニヌルタ神だけでなく、エンキ神やシン神もそれぞれニッペールに自分のエレシュ・ディンギル女性祭司を有していたが、M. シグリスト (Sigrist 1984: 162) が指摘しているように、それらの神々を地位の低い神々と見なすことはできないであろう。エレシュ・ディンギルが宗教儀式でどのような役割を果たしていたのかは極めて曖昧である一方、高位の女性祭司たちが、積極的に経済取引や、さらには土地所有にも関わっていたことが経済文書から明らかになっている。女性たちのタイトルと彼女たちが祭司になる時に嫁資を受け取ったことから推し量って、エレシュ・ディンギルの主な役割は、仕える神の配偶者（妻）になることであったと考えられた。しかし、P. シュタインケラー (Steinkeller 1999: 121) がすでに指摘したように、エレシュ・ディンギルの職は男神にも女神にも設けられていたことが実証されているので、エレシュ・ディンギル女性祭司が神の配偶者になったとは考えられない。J. レンガー (Renger 1967: 144) は聖婚儀礼との関わり合いを示唆するが、彼自身も認めるように、その直接的な証拠はない。

エレシュ・ディンギル女性祭司が宗教儀式に果たした役割について推測した研究の中には、エレシュ・ディンギル女性祭司と性を結びつけるものもあったが、極めて証拠に乏しい。ここでは、二つの例に言及するにとどめたい。

古バビロニア時代ニップールにおけるエレシュ・ディンギル女性祭司（唐橋）

その一つは、M. ストールが再びとりあげているが、都市国家ウルのエレシュ・ディンギル女性祭司は「我らが父」(Pater Noster) 通り 8-10 番にあった壳春宿で働く娼婦だったとするイゴール・ディアコノフの推測である。それに対するコメントとしては、M. ストールの「それを立証するものは何もない」という言葉を引用するだけで十分である (Stol 2000: 462 n. 36)。

エレシュ・ディンギル女性祭司の性に関するもう一つの例は、それほど極端ではないが同様に想像の産物である。ナディートゥム女性祭司と同じように、エレシュ・ディンギル女性祭司もおそらく子供を産むことを禁じられていたと考えられる。結婚を認められていたのは、マルドウク神のナディートゥム女性祭司だけであったらしい (Barberon 2012)。彼女たちはしばしば良家の子女で、神に献げられたのであった。一部の研究者は、出産禁止だけでは不十分で、そのような規定があったとする証拠がないにもかかわらず、彼女たちは「処女」であることも求められたと推測する (Stone 1982)。さらに、E. ストーンは、ルクル（ナディートゥム）の職は「あまりに地位が高いため、ふさわしい配偶者を見つけることができない女性たちを養う方法として設けられた」と繰り返し主張した (Stone 1992: 19)。筆者は、ニップールのナディートゥム女性祭司についてストーンが行った先駆的な研究の価値を十分認めるものであるが、そのような解釈は、修道院にこもった女性たちや修道女になった富裕な王女たちのようなキリスト教的ヨーロッパの概念に結びついているように思われる。したがって、筆者は、時代錯誤的な連想を引き起こし易い「修道院」あるいは「修道女」という用語は用いるべきではないと考える。

R. ハリス (Harris 1964; 1975) と N. ヨッフィー (Yoffee 2004: 116-121) は、ナディートゥム女性祭司に異なる視点からアプローチした。彼らは、その職は、宗教的な独身主義の誓約というよりも、家族の財産の相続に関わっていると考えた。すなわち、ナディートゥムの制度は、もし結婚した

ら夫の家族に渡ることになってしまう財産を、ナディートゥム職に就くことで自分の父の家にとどめおくことを確実にしたのではないかという解釈である。

起源がどうであれ、これらの祭司職は、女性たちが単に男性の意のままに動かされる駒にとどまるのではなく、古代ニッペールの宗教および経済活動に積極的に参加する機会をつくった。このような機会を、古代メソポタミアにおける男性による女性抑圧のもう一つの道具にすぎないとして退けるのは、古代の現実を描くことより、現代の歴史家の必要に答える特定の女性像をつくり出す。

ニッペールのルクル（ナディートゥム）女性祭司

もし実際に、ニヌルタ神のエレシュ・ディンギルとルクルの役職が少なくとも間接的に関連しているなら、彼女たちの社会的役割に相等しい点を見出すことができるであろう。ルクル女性祭司は行政・裁判文書によりしばしば現れるので、彼女たちの役割はよりよく知られている。例えば、ダミクトゥムという名前の女性は、しばしば、エンリル神やニンリル神、ニヌルタ神のためにさまざまな種類の食物の供物を調達する役割を担っていたようである。彼女は主に、リムシン三十一年の文書に言及されている。この女性が、リムシン九年の文書に登場するダミクトゥムというニヌルタ神のルクルと同一人物であったかどうか定かではないが、さまざまな食物の供物を供給することとルクル女性祭司のハウスホールドの間に明らかな繋がりがあったと考えられる。これらの文書にニヌルタ神のエレシュ・ディンギル女性祭司が言及されることはないが、それは、エレシュ・ディンギルがニヌルタ神に仕える高位の祭司として、ルクルの上位にあり、したがって、宗教祭儀の一部を準備するのに必要な日々の取引に関わっていなかったのかもしれない。

古バビロニア時代ニッペールにおけるエレシュ・ディンギル女性祭司（唐橋）

A. ゴデリス（Godderis）が最近公刊した、イエーナにあるヒルプレヒト・コレクションのニッペール出土のアーカイヴ・テキストは、この見方をたしかなものにすると思われる。すなわち、ニヌルタ神（および他の神々）のルクル（ナディートゥム）女性祭司は、古バビロニア時代のニッペールにおいて活発に経済活動に参加していたのであった。彼女たちは、しばしば、不動産の売り手あるいは買い手として、また、銀や必要品の貸し手として登場する。さらに、ニッペールからの最近の証拠は、結婚してよその子を養子にしたナディートゥム女性祭司の例がいくつかあったことを示している。例えば、ナラムトゥムという名前のルガルアバ神のナディートゥム女性祭司は、イッディンエンリルという男性と結婚し、ミギルエンリルとウルパビルサグという二人の男子を養子にした⁸⁾。そこに提示された証拠から、そのような養子縁組は、女性祭司の老後の収入を確保し、また、おそらく彼女の財産が彼女あるいは彼女の夫の死後彼女の兄弟たちに戻されることを避けるためであったと推測される。全てのナディートゥム女性祭司が結婚し養子を迎えることができたかどうかはわからない。筆者の知る限りにおいて、結婚し養子縁組みをしたニヌルタ神のナディートゥム女性祭司の例はまだ見つかっていない。

ナディートゥムが古代の経済活動における活発な参加者としてしばしば文書に登場するのに対し、エレシュ・ディンギルはニッペールの経済記録に非常に稀にしか言及されない。このことから、前者が食物と食物の供物の調達を担当し、他方、後者は神々を養う日々の儀礼の遂行に専念したと推測されるかもしれない。

ま　と　め

ニッペールにおけるニヌルタ神のエレシュ・ディンギル女性祭司がどのような宗教的・経済的役割を担っていたかについていえることはあまり多

くない。史料のギャップは、慎重な考察に基づいた推測で埋めるしか手がない。「シンイッディンナムからウトゥ神への手紙」のような古バビロニア時代の文学テキストは、ルクルを含む女性祭司たちが、「野蛮」な文化にはない「シュメール」文化特有の印として見なされていたことを物語る⁹⁾。王たちは、自分を褒め称える詩文の中でしばしばエレシュ・ディンギル女性祭司の任命に言及するが、それは、彼らが宗教的責任を全うし、神々に好意をもたれていることを示すためであった。女性の祭司職を良家の独身の子女たちに社会的な場を与えるための制度と見なすのではなく、むしろ、宗教・経済・文化においてこれらの女性たちの果たした重要な役割を認識すべきであろう。

謝辞

2017年11月中央大学で刺激的な研究会を主宰し、筆者をそれに招いてくれた唐橋文に感謝したい。また、本稿を執筆するにあたって、オンラインのePSD やISSL, ETCSLがとても役に立ったこともここに合わせ述べたい。

注

- 1) ニッペールにエンリル神のニン・ディンギル（ウグバトゥム？）がいたというウェステンホルツ（Westenholz 1992: 310）の主張は、すでに Sigrist 1997: 179 および Sigrist 1984: 162 が指摘しているように誤りである。問題のテキストは PBS 13 61 (=CBS 14217 + CBS 8550)=Sigrist 1977; PBS 13 61 はエンリル神のニン・ディンギルではなく、ヌスカ神殿に関係していると思われる六人のニン・ディンギル（=エレシュ・ディンギル）に言及している（第8欄 20 行。第6 欄1行とするのは Renger 1967: 146 n. 252 と Sigrist 1984: 162 の誤り）。PBS 13 61 のオリジナル翻字の欄番号に誤りがある。より新しい翻字と研究は Sigrist 1977 参照。
- 2) 粘土板文書 NBC 9198 に記されている *mu Na-ah-ma-tum en ^dNin-urta ba-hug-
ḡa₂* 「ニヌルタ神のエン女性祭司ナフマトゥムが任命された年」という年名である。これについては、Beckman 1995: 108 および Richter 2004: 60 n. 271 参照。
- 3) Stol 2000 および CAD の ēntu と ugbabtu の項目参照。
- 4) 行政文書や裁判記録に言及されるルクル女性祭司については、Stone 1982, Stone 1991, Robertson 1992, Goddeeris 2016 等参照。

古バビロニア時代ニップールにおけるエレシュ・ディンギル女性祭司（唐橋）

- 5) 四コラム粘土板文書は（アッカド語の sattukku「サットウック」に対応するシュメール語の）sa-dug₄という単語を用いてはいないが、それらの考古学的コンテキストからサットック・アーカイヴに関連していると考えられる。また、目的はあまりはつきりしないが、それらは食物の供物の再分配に言及している。
- 6) Goddeeris 2016, vol. II, pp. 449–450 参照。ルクル（ナディートゥム）女性祭司は、ワラドシン、リムシン、サムシルナの治世に例証されているので、サットウック・アーカイヴと時代的に重なる。
- 7) テキスト Ni 2426 iv 1-2 (Çig 1992: 94): é-NIN ^dEn-lí-lá / é-NIN ^dNin-lí-lá. é-NIN「ニンの家」という表現は、女性祭司の物理的な建築物である「家」と「ハウスホールド」の両方を意味し得る。
- 8) Goddeeris 2016, vol. I, p. 326.
- 9) 「シンイッディンナムからウトゥ神への手紙」24 行目。テキストと参考文献については、Brisch 2007: 158–178 参照。

参考文献

- Bahrani, Z. 2001. *Women of Babylon. Gender and Representation in Mesopotamia*. London: Routledge.
- Barberon, L. 2012. *Les religieuses et le culte de Marduk dans le royaume de Babylone*. Mémoires de NABU, 14. Paris: Sepoia.
- Beckman, G. 1995. *Old Babylonian Archival Texts in the Nies Babylonian Collection*. Catalogue of the Babylonian Collections at Yale, 2. Bethesda, Maryland: CDL Press.
- Brisch, N. 2007. *Tradition and the Poetics of Innovation: Sumerian Court Literature of the Larsa Dynasty (c. 2003–1763 BCE)*. Alter Orient und Altes Testament, 339. Münster: Ugarit-Verlag.
- . 2017. To Eat Like a God: Religion and Economy in Old Babylonian Nippur. Pp. 43–53 in *At the Dawn of History. Ancient Near Eastern Studies in Honour of J.N. Postgate*, ed. Y. Heffron et al. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.
- Butler, J. 1990. *Gender Trouble, Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge.
- Çig, M. İ. 1992. Eski Babil Çağına ait iki Tüketim Listesi. Pp. 91–96 in *Hittite and Other Anatolian and Near Eastern Studies in Honour of Sedat Alp*, ed. H. Otten et al. Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- Goddeeris, A. 2016. *The Old Babylonian Legal and Administrative Texts in the Hilprecht Collection Jena*. Texte und Materialien der Frau Professor Hilprecht Collection of Babylonian Antiquities im Eigentum der Friedrich Schiller Universität Jena, 10. Wiesbaden: Harrassowitz.

- Harris, R. 1964. The *nadītu* Woman. Pp. 106–135 in *Studies Presented to A. Leo Oppenheim, June 7, 1964*, ed. R. Biggs and J.A. Brinkman. Chicago: The Oriental Institute.
- . 1975. *Ancient Sippar: A Demographic Study of an Old Babylonian City (1894–1595 B.C.)*. Uitgaven van het Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut te Istanbul, 36. Leiden: Nederlands Historisch/Archaeologisch Instituut te Istanbul.
- Renger, J. 1967. Untersuchungen zum Priestertum in der altbabylonischen Zeit, Teil 1. *Zeitschrift für Assyriologie* 58: 110–188.
- Richter, T. 2004. *Untersuchungen zu den lokalen Panthea Süd- und Mittelbabylonien in altbabylonischer Zeit. 2., verbesserte und erweiterte Auflage*. Alter Orient und Altes Testament, 257. Münster: Ugarit-Verlag.
- Robertson, J. F. 1992. The Temple Economy of Old Babylonian Nippur: the Evidence for Central Management. Pp. 177–188 in *Nippur at the Centennial. Papers Read at the 35e Rencontre Assyriologique Internationale, Philadelphia, 1988*, ed. M. DeJ. Ellis. Occasional Publications of the Samuel Noah Kramer Fund, 14. Philadelphia: The Museum of the University of Pennsylvania.
- Sallaberger, W. 1997. Nippur als religiöses Zentrum Mesopotamiens im historischen Wandel. Pp. 147–168 in *Die Orientalische Stadt: Kontinuität, Wandel, Bruch. Colloquien der Deutschen Orient-Gesellschaft*, 1. Saarbrücken: SDV Saarbrücker Druckerei und Verlag.
- Sallaberger, W. and Huber Vuillet, F. 2003–2005. Priester. A. I. Mesopotamien. Pp. 617–640 in *Reallexikon der Assyriologie und Vorderasiatischen Archäologie*, vol. 10. Berlin: DeGruyter.
- Sigrist, M. 1977. Offrandes dans le temple de Nusku à Nippur. *Journal of Cuneiform Studies* 29: 169–183.
- . 1984. *Les satukku dans l'Ešumeša durant la période d'Isin et Larsa*. Bibliotheca Mesopotamica, 11. Malibu: Undena.
- Stol, M. 2000. Titel altbabylonischer Klosterfrauen. Pp. 457–466 in *Assyriologica et Semitica: Festschrift für Joachim Oelsner*, ed. J. Marzahn and H. Neumann. Alter Orient und Altes Testament, 252. Münster: Ugarit-Verlag.
- Stone, E. 1982. The Social Role of the Naditu in Old Babylonian Nippur. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 25: 50–70.
- . 1992. *Nippur Neighborhoods*. Studies in Ancient Oriental Civilization, 44. Chicago: The Oriental Institute.
- Steinkeller, P. 1999. On Rulers, Priests and Sacred Marriage. Tracing the Evolution of Early Sumerian Kingship. Pp. 103–137 in *Priests and Officials in the Ancient Near East. Papers of the Second Colloquium on the Ancient Near East – The City and Its Life, held at the Middle Eastern Culture Center in Japan (Mitaka, Tokyo), March*

古バビロニア時代ニップルにおけるエレシュ・ディンギル女性祭司（唐橋）

- 22–24, 1996, ed. K. Watanabe. Heidelberg: Universitätsverlag C. Winter.
- Waerzeggers, C. 2010. *The Ezida Temple of Borsippa. Priesthood, Cult, Archives*. Achaemenid History, XV. Leiden: Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten.
- Westenholz, J. G. 1992. The Clergy of Nippur: the Priestess of Enlil. Pp. 297–310 in *Nippur at the Centennial. Papers Read at the 35e Rencontre Assyriologique Internationale, Philadelphia, 1988*, ed. M. DeJ. Ellis. Occasional Publications of the Samuel Noah Kramer Fund, 14. Philadelphia: The Museum of the University of Pennsylvania.
- Yoffee, N. 2004. *Myths of the Archaic State: Evolution of the Earliest Cities, States, and Civilizations*. Cambridge: Cambridge University Press.